

# 巻頭に寄せて

小 倉 俊 雄

今日企業、特に当社のごとく化学工業を基盤とするものにとっては、研究機能のウエイトは致命的に大きい。

既製品の新たな用途の開発、新製品の創造等は皆研究の成果に負うところが多い。

研究者の日常の仕事は、そと目には倦怠をさそう文献あさりや、単調な実験の繰り返しに過ぎない静かな毎日の連続と映るかも知れない。

しかし一度内面をうかがえば、そこには鋭い嗅覚をもって獲物を追う猟犬にも似て執ようにテーマを追求し、又孤独な哲学者のように物象の秘密と実験データとの対決に思索をこらし、何物かを求め、何物かを生み出さんとする研究者の焦燥と苦悩を見出す。

又ある化学者が、「実験室は小さく設備も貧弱であった。しかしそこには、何ものにも替えがたいあるものがあつた。そこには一人一人をとらえて離さない仕事の喜びと、科学的な精神が支配し、各々はここで働くことに限りない幸福を感じた。」ともらしているが、このわずかな言葉の中にこういう雰囲気醸成した研究管理の一つの姿とともに未知の扉をひらこうとする一人一人の研究者のひたむきな純粋な情熱を感じとることができる。

とかくわれわれは、静かな日常作業の外のみを見て研究者の魂の灼熱とその格闘を見落し勝ちである。深い理解を持つことが必要であろう。

幸にして当社の新しい研究所も完成し研究員の一人一人が地道な研究に専念しておる。これからが楽しみである。

「東洋曹達研究報告」も順調に巻を重ねている。

論稿を発表するに当っては一抹の不安と同時にあるものを生み出した喜びもあるはずである。

これをステップにしてさらに前進である。この過程を通じて貴重な経験と知識が累積されていく。

不死鳥の「バイタリテー」をもつての限りなき前進。

そこに私は当社のたくましい発展の姿を見出す。

研究員各位の一層の御研さんを祈ること切である。

(常任監査役)